

# 巻頭言

安村 仁志

主の聖名を賛美します。中部部会の働きの一つである「会報」が続いて発行できますことを主に感謝いたします。

2017年が近づいてきました。一般に言う“ルターの宗教改革”後500年に当たる年です。何も1517年に急に宗教改革が起こったのではないにしても、「95ヶ条の論題」(“Disputatio pro declaratione virtutis indulgentiarum”(『贖宥状の意義と効果に関する見解』))が同年10月31日にヴィッテンベルク大学の聖堂の扉に張り出されたことをもって節目の年としているわけですから、私たちは改めて宗教改革の精神について現在の姿を照らし合わせつつ振り返りたいものです。当部会では2年ほど前からそのことを理事会などで話し合い、昨秋の研究発表会や本年度の公開講演会でルター関連のテーマを取り上げるとともに、理事会でも会議終了後メンバーのあいだでミニ発表会を始めているところです。キリスト教の歴史の中で《宗教改革運動》が起こった背景、そこで問われた問題や論点を深く顧みるとともに、以後の500年の歴史をも冷静に見ること、現在における私たちと《宗教改革の精神》との関係を新たに問うことを通して2017年を迎えたいものです。

昨年から今年にかけて所属する教会の読書会(月1回開かれ、各回20名弱の方が参加＝内約半分が教会員以外)で参加者の皆さんとサン・テグジュペリの『人間の大地(Terre des hommes)』(みすず書房「サン=テグジュペリ・コレクション」所収版、山崎庸一郎訳)を読んできました。少々難しそうな表現もあるのですが、一同感動しています。

何とも魅力的な「大地はわれわれ人間について、万巻の書物より多くのことを教えてくれる」で始まる本書は、郵便飛行士としてヨーロッパからサハラ砂漠の上を西アフリカに向かう航路、アンデスを越える南アメリカ横断航路などをめぐり、自身、同僚の飛行体験に基づいて綴られていくエッセー風の文です。長く、陸や海という平面を辿って他の世界との間を行き来してきた人間が、空というそれらを超越したところを通して移動すること、且つ高さ所から大きくものを見ることを手にしたことを基に、その体験を通して、人間、人間の住む世界、そこで営まれる人間の生活について深い洞察が綴られています。

第4章《飛行機と地球》の冒頭には「飛行機は一個の機械にはちがいないが、しかし、なんという分析の道具だろう！この道具はわたしたちに、大地の真の面ざしを発見させてくれたのだ」とあり、ここから、大地を這う“道路”と大地の上高くを飛ぶ飛行機の、大地に住み・生を営む人間を見るうえでの違いが分析されます。道路は山や砂地を避けて泉から泉に向かう一山、森、湖、砂漠などの“障害物”を迂回する一ので本質的には曲線で

あり、道路からだけだとそれら障害物の向こうで営まれる人間の世界を見ることのできない(道路から見るのは、臣下のところを訪れて、彼らとその治世に満足しているかどうか知ろうとした女君主に似ている。廷臣たちは道筋に巧みな舞台装置を作り、踊り子たちを雇ってバレエを見せ、それらによって君主に王国のなにも見せないようにする；田園の奥で飢えて死んでいく者たちが彼女を呪っていることを知らせないようにする；その結果君主は実態というものを全く見ることができない、とたとえられている)のに対し、飛行機の航路はそれらの障害物を超えていくもので直線的であり、高さところから全体を見通すことができる(宇宙的尺度で人間を判断することになった、人間の歴史をさかのぼって読むことになった、と表現される)というのです。ここには、われわれがものを見たり、ものを考える際に取りべき態度についての鋭い問いかけがあるように思われます。障害物を避けて通る道路からだけ見るのでは、奥に潜むものを見たり、見抜くことができない、従って深くものを考えることもできないということで、その結果表面的しかものを見たり、考えたりしないことになってしまいます。そして、実際にわれわれはそうなりやすく、見る部分も限られ、思考も部分的となるということです。それに対し、飛行機からのように俯瞰的にものを見ることができれば、全体を見る、大きくものを見、考えることができ、大きな違いがあるのですが、今日特にわれわれは前者になりがちです。加えてわれわれの時代は、飛行機の時代を越えて、別の形の、より“魅力的”に見える、移動手段の一種(自らは動かないのに結果的には移動を可能にする)を手にしてあります。情報テクノロジーです。便利で、万能に見えるがゆえに、大いに利用され、魅せられています。しかし、その分ゆっくと、大きくものを見たり、考えたりすることを奪っているかのように思えます。そのことにより、われわれの生活自体が“刹那的”にさえなっています。“いま”、“わたしたち”さえ良ければよいという生き方が助長されているかのように見えます。サン・テグジュペリは、この書でまた、大地に生きる人間に関して、「たがいに結びつくように試みなければならない」と述べます。「他人の意識を発見することによって自己を拡充する」とも言います。このほか数え上げればきりが無いほどに、人間とその生活をめぐる珠玉のことがちりばめられている本書は、深いところで人間と人間の生きる大地を創られ、司られている神さまを思う心を引き出す作品になっていると思います。いま、神さまの創られた人間の尊厳の重み、深みをも感じとらせてくれる書の余韻に浸っています。

さて、私ごとになりますが、今年度の総会をもって中部部会の理事を退かせていただきます。思い返せば、1982年に本部会が発足して以来今日に至るまでずっと理事をつとめさせていただきました。最初に選出された理事は内村撒母耳氏、河野勇一氏、黒川雄三氏、後藤喜良氏、鈴木健之氏、牧田吉和氏と私の6名で、黒川雄三氏が部会理事長となられました。当時のメンバーは20名ほどでした。その頃のこと、その後のことは、部会創立20周年記念の集いで配布した資料(2002年5月13日)、学会誌2010年度号の拙稿(「中

部部会の歩みと展望」)をお読みいただければ幸いです。最初の頃、夜に理事長黒川先生の志賀教会で理事会が開かれていたことを思い出します。2005 年秋には他部会のご支援・ご協力をいただいて名古屋で全国研究会議を開くことができたことも感謝のうちに思い起こされます。福音主義神学会中部部会の歩みを通してこの地域の多くの方々、東京や関西の先生方との交わりができたことは大きな恵みです。2003 年からは理事長をつとめさせていただきましたが、この間お支えくださったみなさま、格別理事として会の運営についてお助け下さった先生方に心より感謝申し上げます。勤務先の大学で、思いもかけず副学長という重責を担うことになり 4 年目を迎えています。世の働きではありますが、これも主のみ旨のうちと信じてつとめさせていただいております。その働きも年々増え、忙しさを加えてきておりますので、ご迷惑をおかけしてはいけないと思い退かせていただくことにいたしました。30 年が経過した本部会が、難しい時代にあっても福音宣教に資する研究活動をこれからも続けていけるよう切に祈っております。

(中部部会理事長)

